

第九回 齋藤茂吉短歌文学賞

吉田 漱 『「白き山」全注釈』

短歌新聞社

正賞・茂吉自筆色紙の織画
副賞・賞金百万円

選考委員

委員長 岡井 隆

委員 中村 稔

馬場あき子

前 登志夫

本 林勝夫

(五十音順)

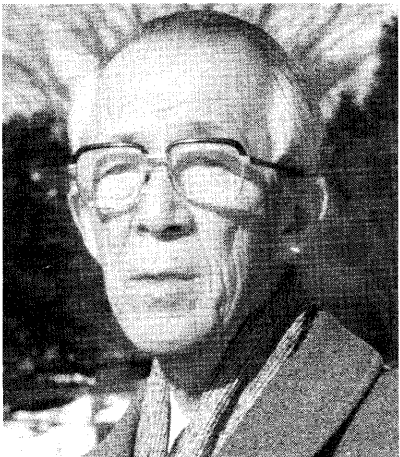
吉田 漱 『白き山』全注釈（抜粋）

163 最上川の上空にして残れるはいまだうつくしき虹の断片

板垣家子夫の『随行記』によると、台風の子報があった時の、気象状態の作品で、「先生と私が橋（大橋のこと）を渡って行く時、ちょうど川上の方に虹が立っていた。町（大石田町）と今宿部落との中間あたりから立ち、大きく輪を描いて川を越し、来迎寺部落あたりに一方の脚がかかっていた。雲の動きが早く、そして低かった。横山部落まで橋を渡り、戻って来る時、虹の半ばから上に断雲が動き、そのため切れ切れになって虹の上方が見えていたのである。先生は、橋上に立ってこの光景を長い間見ていたのである。すなわち取材したのはこの時である」とかいている。『手帳』では、この歌はほかの歌と同じく「八月一日」の日付でメモされているが。

この時の虹は、多分、橋の中程で立ちどまって見たのであろう。虹は見事に最上川をまたぎ、兩岸にとどいていたとみえる。だとすると、その虹の橋の真下に、ほぼ現在の歌碑が建っている「虹の丘」がおさまることになるだろう。

が、それは一瞬のこと。雲がさかんに動いて居て、虹はすぐ千切れたものとみえる。そこに虹の断片が残って、——「うつくしき」でなく、「いまだ」を冠して、「いまだうつくしき」であるところに注意すべきだ。それゆえに読む者の空想をより刺激し、色彩を感じさせる。「断片」という強い響きの漢語で切ったのも効果的。茂吉の秀作中でも屹立する一首。



第9回齋藤茂吉短歌文学賞受賞者略歴

吉田 漱 (よしだ すすぐ)

歌人。美術史家。元岡山大学教育学部教授。

河鍋曉斎記念美術館名誉会長。

広重美術館（天童市）顧問。

子規庵保存会理事。

大正11年3月11日東京生まれ。東京美術学校卒。

昭和22年「アララギ」に入会。昭和26年近藤芳美を中心とする「未来」創刊に参加。昭和28年

「未来歌集」刊行に加わる。

歌集に「青い壁画」「FINLANDIA」「あけもどろ」、研究等に「近藤芳美私註」「土屋文明私記」「中村憲吉論考」「赤光」全注釈、ほかに美術書などがある。

第31回短歌研究賞（平成7年）を受賞。

現代歌人協会に所属。

受賞のことば

吉田 漱

昭和二十二年十二月十四日齋藤茂吉が戦後始めて東京歌会に出席され、それを歌ったのが「アララギ」に載った最初の歌であり、昭和二十八年「齋藤茂吉追悼号」にかいた小文が「アララギ」にはじめての文章でした。齋藤茂吉の名を知ったのは戦前ですから以来長い間、何にかに茂吉の生涯と業績を考え追尋しつづけて来たと思います。

たまたま続けて初期と晩年の歌集二冊の全注釈という仕事を手かけ、特に『白き山』を通じ、茂吉の風土も作品も一層親しいものになりました。ともかくまとめ上げるのが第一で、他は念頭にありませんでした。それが思いがけなく齋藤茂吉の名を冠した賞をいただくことになり、なによりもありがたく、著作につき御援助御協力いただきました方々に厚くお礼を申し上げます。またこの仕事はそれまでの先進の多くの研究精華のお陰を蒙ったこともお礼申し上げたく存じます。私なりの視点、調査で多少のことがあったといえ、それらのお陰で順調に進んだからであります。今後また力をふるって新しい仕事を成したいと願って居ります。

選考のことば

岡井 隆

『白き山』全注釈』の著者には、既刊の『土屋文明私記』『中村憲吉論考』『赤光』全注釈』がある。いずれも、足を使い、充分手間ひまをかけて実地踏査した上で書かれた篤実な研究書である。今回受賞となった本も、この系列の研究書である。実地踏査や聞き書きを援用する作品分析は、従来、国文学の世界でも広く行われて来たが、吉田氏にそこに長い間の短歌作者の眼が加わっていることを思うのである。吉田氏は、わたしの古い友人でもあり、戦後の短歌の世界の移り変りを実作者としてつぶさに体験して来ている。そのことが、齋藤茂吉の作品の解読や分析の上により方に働いていると思う。氏が有数の美術史家であることも同様に本書を豊かにしていると思った。

『白き山』研究の里程標

中村 稔

詩歌俳句の解釈、鑑賞の文章に接して、私自身の文章を含めた自省をこめた感想なのだが、いかに印象批評が横行しているか、という感がふかい。筆者の反応を記すに急であつて、それ以前の事実の把握、認識の正確さが疎かにされているばあひが多い。

吉田漱著『白き山』全注釈』は、そういう意味で、むしろ筆者が『白き山』の歌作のどういう点を読みどころと考へ、どうという表現に感動を覚えたかを記すことについて、きわめて謙抑である。逆に、解釈、鑑賞の基礎となり、背景となつている事実の探索、追求は驚くべく丹念なもので、教えられること多い労作であつた。実際こうした事実の正確な認識と理解の上ではじめて『白き山』鑑賞は成り

立つべきなのである。

そういう意味で、本書は今後の『白き山』研究ないしは齋藤茂吉研究にとつて、まず基礎となるべき、したがつて、後代に読みつがれ、その上で茂吉研究がさらに深められるべき、重大な里程標であると私は考へている。私が本書を齋藤茂吉短歌文学賞にふさわしいものとして強く推した所以は、そういうことであつた。

独特なスタイルの注釈書

馬場 あき子

『白き山』全注釈』は吉田漱氏の『赤光』全注釈』につづく労作である。氏は前著以来、解釈と鑑賞の中に作品の背景となる資料的なものを濃密に導入し、事実への関心を満足させる独特なスタイルをひらいた。茂吉の晩年作のもつ詠嘆の

かげに、寡黙にひそむ過去をひとつひとつ浮上させ、『白き山』から評伝的部分をも含む茂吉像に接することができるようはからわれている。

そこには自ずと浮び上がる戦後のテーマとしての茂吉がおり、蔵王から最上川への風土の変化による茂吉の歌の変化も現地踏査とともにあつて興味深い。基礎資料を充分に援用しつつ立体感のあるへ読みが成立しているのが魅力である。

近代を超えるものへの示唆

前 登志夫

吉田漱氏の『白き山』全注釈』は、私のように作品の背景にくわしくない者には、有益で有難い労作である。たとえば大石田の「聴禽書屋」など、その住居の間取り図があり、作歌に関する地誌の豊かさも特色であろう。黒布で顔をかくす庄内地方の風俗であるハンコタンナなどのスケッチもたのしい。賢しらの観念や

歌論などをふりまわすことなく、着実な実地踏査を基盤としているので、どこことなく重厚な手ざわりがあり、近代を超える『白き山』研究の一方が示唆されているように。

『白き山』研究の道標

本 林 勝 夫

今回の受賞は吉田漱氏の『白き山』全注釈』に決定したが、落ちつくべきところに落ちついた感が深い。吉田氏はこれより先に『赤光』の注釈も刊行しており、本書によつて茂吉生前歌集の首尾をなす二歌集全注釈の偉業を完成した。

とくに本書は『白き山』関係のあらゆる土地に何度も実地調査を行い、従来の注釈には見られなかった成果を示すとともに、当然新しい発見も少なくない。一首一首の解釈も穏当であり、作品の風土的時代的背景、さらには作歌の機微にまで及んで詳細をきわめる。著者の労に敬

意を表し、あらためてこの収穫を喜びたい。

これまでの受賞者

- 第一回 岡井 隆 『親和力』 砂子屋書房
第二回 本林勝夫 『齋藤茂吉の研究―その生と表現―』 桜楓社
第三回 塚本邦雄 『黄金律』 花曜社
第四回 前 登志夫 『鳥獸蟲魚』 小澤書店
第五回 齋藤 史 『秋天瑠璃』 不識書院
第六回 近藤芳美 『希求』 砂子屋書房
第七回 小暮政次 『暫紅新集』 短歌新聞社
第八回 馬場あき子 『飛種』 短歌研究社

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

千九百八十七〇
山形市松波二丁目八一― 山形県文化環境部文化振興課内
TEL 〇二三―六三〇―二三〇六